

# 関西大学博物館 2023年度夏季企画展 「浪速の町絵師 菅楯彦が愛した大阪」開催報告

原 田 喜 子

令和5年(2023)6月11日(日)から7月22日(土)まで、関西大学博物館にて2023年度夏季企画展として「浪速の町絵師 菅楯彦が愛した大阪」を開催した。菅楯彦(1878-1963)は、軽妙洒脱で親しみやすく、洗練された独自の画風を確立し、近代の大阪で人気を博した絵師である。大正9年(1920)から、自らの印に「浪速御民<sup>なにわみたま</sup>」の文字を使用し、昭和37年(1962)には大阪市名誉市民賞を受けた。楯彦が描いた大阪の風景や人々の姿は「浪速風俗画」と呼ばれ、現代人にとっては遠くなってしまった江戸末期から明治初期の大阪の雰囲気伝える貴重な視覚資料でもある。本展覧会では、個人コレクターが蒐集した300点を超えるコレクションの中から48点を厳選して展示した。

大阪における日本画について、美術史上で取り上げられる機会は、東京と京都の日本画に比べると極端に少ないのが現状である。関西大学では、かねてより、近世・近代の大坂(大阪)における日本画に注目し、「大坂(大阪)画壇」と称して作品の蒐集と研究に取り組んできた。そのなかで、近代を代表する絵師の一人として楯彦の名前を挙げている。

展示構成は第1章から第4章で展開した。第1章は、「暮らしとともに」と題して、大阪の四季の風物詩を描いた掛け軸を、正月から春夏秋冬の順に並べた。季節や行事、目的に応じて大阪の人々が暮らしの中に絵を取り入れていた様子を再現できればと考えた。第2章は、「歌と舞と酒」と題して、歌と舞と酒に関する掛け軸とともに酒器や舞扇などを展示し、書画会の雰囲気が出せるように工夫した。第3章は、「一品に華を添える」と題して、楯彦の絵によって彩られた道具を集めた。「一介の町絵師」を自称し、道具に絵付けをするという、楯彦の画業の幅広さを示した。また、道具を制作した作家との交流を示すことも狙いとした。第4章は、「楯彦の技」と題して、浪速風俗画だけでなく、歴史や伝説を描いた作品から、繊細な筆



ポスター (A2サイズ)

致や豪快な構図など、軽妙洒脱なだけではない楯彦の技を示すように心がけた。「静湖」という画号時代の歴史画《藤原惺窩先生講論語大阪城》や、伝説をもとにした作品である《蓬莱仙殿》、《清明の祈》などに続けて、世俗的な作品である《浪速風俗図十二ヶ月屏風 右隻》へと移り変わるように並べた。《春港良宵》では、楯彦を代表する技法である「片ぼかし」の作例を見せた。展示の補足として、楯彦の略歴とその背景にある大阪の文化と美術の歴史について記した全8ページのパンフレットを作成し、来館者に配布した。

関連イベントとして、講演会「菅楯彦の魅力と大阪の風土を語ります」を7月17日(月・祝)に以文館4階セミナールームで開催した。講師に関西大学の中谷伸生名誉教授を迎え、現

代のマンガ・アニメーションに先駆けた独自のスタイルなど、楯彦の魅力について語られた。参加者は103人であった。

広報では、学内の広報課への情報提供、全国の博物館への広報物の送付など従来の活動に加え、吹田市内の阪急電鉄沿線駅でのポスター掲示や新聞社への情報提供を行った。また、水都大阪コンソーシアムとの連携により、展示解説の動画と講演会の動画をYouTubeで配信することができた。今後、SNSの利用については慎重に判断する必要がある。

来館者数は合計で1,727人であった。中には、以前より楯彦ファンで自身もコレクターであるという人や、生前の楯彦と交流を持った人の子孫などがあつた。特筆すべきは、最近の大坂画壇の展覧会で楯彦作品を観てファンになったという人が近畿圏だけでなく、関東圏からも来館があつたことである。

現代では忘れられつつあると思われた菅楯彦であるが、作品や人を通じて現代にも生き続けていることが実感できた展覧会であつた。

---

関西大学博物館 学芸員



展示の様子（第1章部分）



展示の様子（第2章部分）



展示の様子（第3章部分）



展示の様子（第4章部分）